



加
 治
 田

东
 浓

藤
 山
 下

特 別
 15
 6673
 20
 早稲田大学図書印



寶曆十一辛巳



歳旦

竹珂園
見尔

神楽之

こゝ海のさめき

すゝしめ次

常鹿日喜美のゆくと
銘

蕉西坊

巴山

美多之唐よハ

何と亦福と

各録

油市之吉〇と八斗北あゆまて

守松

楠之長教習して初めく油津を

左北

福多之輪ハせり子ノ氣の安し

女
可調

先キくけり己り自かしくやま所馬

源合

年笑の心をよても嬉し忘る袖

言人
有隣

門札之とを柳のさけこころ

具柳

雲の香もこく御芳し油二燈

仙市

年北且ハとりの妻も先り

度後よそしきり

宗儀舎

地して又下さのめてたさ難事ハ
芋夕

辰 柴木書

二年ぬり作阿婆をよみ陀と
あつゝゝゝ

以哉坊

形もゆゑのわが却とせよ方の舟

煤もろくなく動けぬ決意 足尔

せん存りと夢よ八世原のたをよふ 巴山

舟花まてのワケりきりたり 石屏

節々の髪よ八世のこらんで居り 共女

母ハかたけのむきこ吹種 仙市

五的の歌うもはもまろし 舟柳

藤もたつとくまの柳の柳柳 九兆

まのの原をハなこの
井阿婆をよみ陀と
凡俗と文章はなれハ

又作坊

おのひのうやや年来の市北京まゐり

隠栖より花嶽のもの静

なりよ静してまことと悠遊

速のし平を仍のこ

甚西夏

善ハ善又佳て杜よよそ年の心

例の二三子よ呼ぶ納會を

信よとて

余深夏

おと子よ事波情ん年の奥

原をもちろむらひ言と夕

郊外よ遠遙して

作坊夏

けと年ハいとむぬもなりよそふ

